文教大学図書館における電子Bookの導入

八代　隆政、中村　保彦（文教大学湘南図書館）

1．文教大学図書館の概要

文教大学図書館は、埼玉県越谷市の越谷キャンパスにある越谷図書館と神奈川県茅ケ崎市の湘南キャンパスにある湘南図書館の２館よって構成されている。すなわち、越谷キャンパス（教育学部、人間科学部、文学部）に越谷図書館、湘南キャンパス（情報学部、国際学部、健康栄養学部、女子短期大学部）に湘南図書館を設置し、各館はそれぞれ独自に、キャンパスの学部構成に応じた図書館サービスや蔵書構築を展開している。なお、両図書館を総称して「文教大学付属図書館」としている。また、対外的な対応窓口に関しては、越谷図書館が文教大学付属図書館を代表し、湘南図書館が文教大学女子短期大学部付属図書館を代表している（文中、越谷図書館、湘南図書館と記す）。

文教大学図書館における2010年４月１日現在の奉仕対象者および資料規模は、下記、**表１**（奉仕対象者数）、**表２**（資料規模）のとおりである。

図書館の規模を測る一要素として、**表１**の奉仕対象者数を取り上げてみると、越谷図書館が約6,700人、湘南図書館が約4,100人となっている。越谷・湘南両図書館の合計が約１万人を越える、中規模の私立大学図書館といえるだろう。

現在、本学は上記資料の他、越谷・湘南両図書館の共通経費化を図るとともに、各学部の協力も得て、30を越える各種データベースを契約している。また、外国雑誌については、「プリント版＋オンライン版」契約しているタイトルが31種、電子ジャーナル単独契約が31種ある。電子ジャーナルについては、これらの個別タイトル計約62種を除けば、ほとんどがパッケージまたはアグリゲータ系の契約となる。国内のものを含めると7,700種以上の電子ジャーナルの全文アクセスが可能となる契約をしている。なお、本学が契約している電子ジャーナルへのアクセス環境を円滑化するために、越谷・湘南各図書館のWebトップページに「文教大学電子ジャーナルポータルサイト」をゲートウェイとして設定している。さらに、湘南図書館OPACの誌名検索からは、オープンアクセスジャーナルのタイトルを含めて、電子ジャーナル24,578種の全文にアクセス可能となっており、プリント版ジャーナルとの一元的な検索環境の整備が進展している。

表１　奉仕対象者数

	越谷図書館	湘南図書館	合　計
学　生（院生、聴講生を含む）	5,335人	3,589人	8,924人
教職員（非常勤を含む）	597人	347人	944人
学外者（市民、卒業生等の実数）	795人	194人	989人
合　　計	6,727人	4,130人	10,857人

表２　資料規模

	越谷図書館	湘南図書館	合　計
蔵　書　冊　数（うち洋書）	440,535冊（38,971冊）	194,702冊（32,313冊）	635,237冊（71,284冊）
年間受入冊数（うち洋書）	9,635冊（696冊）	5,396冊（173冊）	15,031冊（869冊）
所蔵雑誌種数（うち国外）	5,064冊（808冊）	3,803種（644種）	8,867種（1,452種）
年間受入雑誌種数（うち国外）	2,390種（220種）	1,475種（66種）	3,865種（286種）
年間受入新聞種数（うち国外）	31種（9種）	80種（5種）	111種（14種）

2．電子Bookの導入過程

大学図書館界における電子情報資源（Electronic Resources）の展開は、“Born-Digital”の典型とされる電子ジャーナル（Electronic Journal）の進展から始まる。ただし、大学図書館にとっては、これら電子情報資源の提供・管理・利用の仕組みが様々なことと、各大学図書館の資源管理の方法の多様性などから、電子情報資源の導入・活用状況については模索段階にあるといえる。また、電子情報資源には、電子ジャーナルだけに限らず、シラバスや講義資料、紀要論文など大学内において生産される様々な資料が含まれ、「機関リポジトリ」などの情報公開・発信の仕組みも重要度を増している。ただし、本稿は、利用許諾などにより提供される電子情報資源を対象とし、特に電子Book(e-Books, Electronic Books)に関して述べる。なお、電子情報資源のうち、大学図書館などの機関が購入するソフトウェアとして、Web上で利用可能な「電子書籍」の呼称は、個人向けの端末機器「電子ブック（リーダー）」の商品名などと区別するため、「電子Book」と表現する。

本学の学内における電子ジャーナルを中心とする電子情報資源の拡がりは、前章の概要に言及した。そして、その拡がりは図書館蔵書種別上の「図書」にも影響が及んだ。導入の過程は、段階別に三つの期を経て、2010年４月現在、本学の「電子Book」タイトル数は1,177となっている。その経緯について、開始から各期別に述べる。

2．1　第１期：教育学部大学院開設準備（2006年度）

電子Book導入の発端は、越谷キャンパスにおける、2007年４月の大学院教育学研究科開設時にあった。すなわち、設置用学術図書として、OCLCのNetLibraryが提供する教育学の洋図書428タイトル（約646万円）を購入したことから始まる。従来なら、新学部・学科設置の際には、伝統的なプリント版図書を購入するのが通例だった。しかし、通例と異なった電子Book導入を開始した理由は、次のような利点があったからだ。

① 物理的な書架スペースが不要

越谷図書館においては、書庫狭隘化により収納スペースの余地が限界にあった。しかし、電子BookならWeb上の利用であるため、導入に際して書架収納計画の立案や書架スペースの確保は不要。

② 入手の確実性

大学院研究科設置用図書という理由から、文部科学省への申請手続き等の期限があり、図書館としては、期限内の確実な入手が要請された。特に、プリント版図書、国外刊行図書の場合、期限内の納品に不確実なことが多く、はじめに選定したタイトルから入手が確実な在庫タイトルへの変更を余儀なくされることがある。しかし、電子Bookの場合は、入手の遅延等、流通上の問題が発生しないという利点があった。

③ 手続き及び利用に至るタイムラグの最小化

プリント版図書では、納品後の受入、資料組織・装備、配架といった一連の手続きを経てようやく利用が可能になる。それに対して、電子Bookは、契約等の諸手続きが済み次第、最小限のタイムラグによっての利用が可能となる。

④ 利用空間・時間の拡張

IP認証によるWeb上の利用が前提となるため、利用者の院生や教員は、図書館に来館して利用手続きすることが不要になる。すなわち、研究室や院生室など学内LANに接続している情報端末からアクセスし利用が可能となる。さらに、SSL-VPN接続により自宅など学外から利用が可能となり、利用空間が拡張する。また、プリント版図書は、誰か別の利用者が借りている間、他の利用者は返却時まで利用不可となる。しかし、電子Bookは複数利用者の同時アクセスも可能であり、24時間どこからでも利用することが可能になる。

⑤ 全学的な利用が可能

本学のように、同一大学に複数のキャンパスがある場合、どちらか一方で契約したタイトルは、両キャンパスで利用が可能になる。そのため、重複購入などの費用的な無駄がなくなる。

⑥　維持・保存の保証

プリント版図書の場合、紛失・盗難、破損、酸性化など保管や保存上の問題点が不可避的に発生する。電子Bookの場合、このような物理的問題が生じる心配はなく、物的な管理上の負担がない。

2．2　第2期：越谷図書館における展開（2007年度～2008年年度）

越谷図書館は、前年度導入した電子Book428タイトルに加えて、2007年度末に図書費・消耗図書費予算のうちから約60万円を充当して、NetLibraryが提供する日本語書籍の電子Book102タイトルを購入した。特に、越谷キャンパスの学部構成を考慮して、主題が、国語学、教育学、数学、統計学、国文学、英文学、心理学のタイトルを選定した。購入価格を単純に比べると、前年度購入の洋図書平均単価が15,090円だったのに対して、2007年度に購入した国内刊行電子Bookの平均単価は6,056円だった。和・洋の違いがあるにせよ、1タイトルの単価は下がっている。

さらに、2008年度末にも資料費予算を調整して、NetLibraryが提供する日本語書籍の電子Book23タイトル（約32万円）を購入した。内訳は朝倉書店刊行の『朝倉心理学講座』19タイトル、残りの4タイトルは『イギリス哲学・思想事典』など、哲学・文学の参考図書（研究社刊行）を選定した。平均単価は14,067円であった。

2007年度から2008年度の2年間で購入した電子Book125タイトルは、主題が越谷キャンパスを構成する教育学部、人間科学部、文学部に関係する和図書だった。導入し始めた頃（第1期）は、大学院設置という理由から外国語学術図書に限定せざるを得なかった。しかし、この第2期は、利用者の対象を学部学生として和図書を選定した。具体的なタイトル選定にあたって考慮した点は、プリント版がすでに越谷図書館の蔵書としてあるかどうかだった。特に、蔵書のうち、シリーズ、講座、全集、著作集など、いわゆるセット物を最優先の対象とした。それは、越谷図書館が直面している最大の問題として、収納書架スペース狭隘化への対策があったからだ。すなわち、プリント版から電子版へのシフトも対策の一手段としての位置付けにあった。なお、優先対象とした主なシリーズは次のとおり。

・シリーズ「日本語探求法」（朝倉書店）
・朝倉国語教育講座（朝倉書店）
・朝倉寛治講座（朝倉書店）
・シリーズ・数学の世界（朝倉書店）
・講座情報をよむ統計学（朝倉書店）
・理工学の数学教室（朝倉書店）
・精選復刻紀伊國屋新書（紀伊國屋書店）
・高等教育シリーズ（玉川大学出版部）

2．3　第3期：湘南図書館の導入（2009年度～）

上記、第1期から第2期（2006年度～2008年度）の3年間に導入した電子Book553タイトルは、利用提供の側面に関してだけいうなら、IP認証によって越谷・湘南両キャンパスのLANに接続されたPC端末によって利用可能である。しかし、それらのタイトルはすべて、越谷キャンパスの学部構成に合わせて、越谷図書館が選定したものだった。

一方、湘南キャンパスにおいては、2010年4月の健康栄養学部管理栄養学科の新設に対応する準備を進めていた。すなわち、設置用資料として栄養学、食品学、公衆衛生学、さらに、カリキュラム関係から心理学、といった各主題の図書、学術雑誌を収集対象として事前の整備をしていた。

まず、伝統的なプリント版として、国内刊行和図書1,035冊、国内刊行和雑誌78種を購入した。さらに、いつでもどこからでも利用が可能な利便性を重視して、国内医学系学術雑誌750誌以上が利用可能な「メディカルオンライン」、アメリカ心理学会刊行の心理学系学術雑誌全文提供データベース“PsycARTICLES”、そして、栄養・食品関係の文献情報検索データベースである“Nutrition & Food Sciences Database”（CABI提供）を導入した。

また、洋図書は海外電子Bookを購入することにした。プリント版図書ではなく電子Bookにし

たのは、越谷図書館における大学院教育学研究科設置の時（第１期）とほぼ同様の理由からだった。すなわち、入手の確実性、手続き及び利用までのタイムラグの最小化、利用時間・利用空間の拡張、全学的な利用が可能、維持・保存の保証、といった利点を優先したからだ。湘南図書館は、蔵書構築の方向性として「ストック型からフロー型へ」を目標にしていたこともあり、物理的な書架スペース狭隘化の問題は、越谷図書館ほど深刻な状況にはなかった。だが、増加し続ける資料の収納・配架に関しては、越谷と同様に恒常的な課題となっており、無視しえない問題だった。最終的には、洋図書624タイトルの電子Bookを購入（買取）した。なお、購入のための予算は「電子情報利用料費」（消耗扱い）による。また、提供者別の具体的な内訳は、下記のとおり。

・NetLibrary提供：525タイトル（医学、栄養学・食品、心理学関係）
・MyiLibrary提供：94タイトル（公衆衛生関係）
・ScienceDirect提供：５タイトル（栄養学・食品、心理学関係のレファレンスBook）

これらのタイトルは、主題が医学、栄養学、心理学関係ということもあり、１タイトルの平均単価が約28,000円となっている。なお、電子Bookを内容的に見るなら、百科事典などレファレンス系の“JapanKnowledge”も取り上げるべきだが、これは、洋図書の海外電子Book購入より前に、国内電子Bookのレファレンスツールとして導入している。

３．電子Book利用環境の現状

この章は、本学における利用可能な電子Book 1,177タイトルの利用環境について述べる。前章にあげた提供者別の電子Bookは、“NetLibrary”、“MyiLibrary”、“ScienceDirect”それぞれWeb上のプラットフォームから入る。文教大学の場合、IP認証による利用契約を締結しているため、学内のLANに接続されているPC端末からすべて利用が可能である。SSL-VPN接続を含めれば、本学在籍の教職員および学生なら、学内・学外の両方からアクセスして利用が可能になる。

しかし、提供者別とはいえプラットフォームが３つ別々にあることは、利用者側の視点からすると使い難く、利用上のインタフェースとして欠点だと考える。そこで、湘南図書館は、対利用者のインタフェースを改善するため、図書館目録システムに工夫を施した。すなわち、それぞれの提供者が提供する契約タイトルの書誌情報と本文へのリンク情報を目録システムに登録することによって、資料探索にOPACを使う際、図書、雑誌、電子ジャーナルなどと一緒に電子Bookも一元的に調べられるようにした。したがって、文教大学における電子Bookの検索および利用の手順は、次の二通りになる。湘南図書館におけるインタフェース改善後の方法、OPACの使い勝手は、②のように反映されている[1)]。

① 越谷図書館ホームページまたは湘南図書館ホームページ：

それぞれから「電子Book」に入る。越谷図書館ホームページからは、“NetLibrary”しかリンクされていないが、湘南図書館ホームページからは、上記、三つの提供者“NetLibrary”、“MyiLibrary”、“ScienceDirect”のそれぞれにリンクされている。

② 湘南図書館のOPAC：

タイトル、キーワード、ISBN、出版社名などから検索する。また、データベース別の検索は、請求記号フィールドに「NetLibrary」「MyiLibrary」「ScienceDirect」と入力する。検索結果一覧のタイトルの右側の緑色のアイコンをクリックすると本文にリンクされる。タイトルをクリックすると詳細データが確認でき、右側の緑色のアイコンまたは書誌データの中のURLをクリックすると本文にリンクされる。

それから、電子Bookの利用環境改善に並行して、電子ジャーナルなど各種データベースと同様、研究支援体制に関する広報が重要になってくる。これに関しては、特に、教員に対する広報の充実を目的として『文教大学の研究支援体制』を配布している[2)]。

4．今後の課題と展望

文教大学図書館における電子Book導入の経緯に関して、概略を上記に述べた。本学が電子Book導入に至った理由は、２章にあげたいくつかの利点を評価したからだが、とりわけ、越谷図書館の書架スペース狭隘化という早急な対策を要する問題があったからだ。もっとも、この事情は本学に限らず、程度の差はあるにしても、全国の大学図書館が直面している共通の問題といえるだろう。とはいえ、本学の電子Bookは導入開始から間もなく、タイトル数も提供者側の日々、増加しつつある提供タイトル総数からみると多い数とはいえない。

今後、電子Bookの展開に関しては、タイトル毎の単価の推移や利用率の測定など費用対効果の側面を含めたタイトル数の整備とコレクション構築、さらに、利用環境整備に付随する維持管理作業が、導入側の課題として考えられる。それから、利用率に関連して、利用統計は、各データベースともタイトル別に月間ダウンロード数のレポート、アウトプットが可能である。ただし、本学の図書館に関していうなら、導入を開始して間もないため、費用対効果を測れるほど利用統計の蓄積がない。それゆえ、利用率の測定や統計の前に、①主たる利用者層（教員、学生）への広報・周知、②OPACを含めた本学全体の利用環境整備（越谷図書館と湘南図書館の統一を含む）、といった課題が残っている。

（やしろ　たかまさ、なかむら　やすひこ）

＜注・参考文献＞

1）本学の越谷・湘南図書館のホームページのURLは、下記のとおり。
越谷図書館：http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/lib/klib/
湘南図書館：http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/lib/slib/index.htm

2）文教大学図書館．文教大学の研究支援体制：データベース・電子ジャーナル・リポジトリ．文教大学教育・研究推進委員会，2010，62p.

文教大学図書館における電子Bookの導入
八代　隆政、中村　保彦（文教大学湘南図書館）

文教大学図書館は、越谷図書館と湘南図書館の2館よって構成されている。本学における電子Bookの導入は、電子ジャーナルを中心とした電子情報資源の拡がりからの影響により開始され、2010年現在の電子Bookタイトル数は1,177となっている。また、電子Book導入の主たる理由は、書架・収納スペースの狭隘化への対策にあり、導入過程は、2006年度から段階別に三つの期を経て現在に至っている。今後の課題としては、利用環境整備や利用率の測定があげられる。